

8月



## あの日のあの川 リレー日記 ～第75話～



あの日のあの川  
リレーDiary

みなさんはどの川でどんなことをした記憶がありますか？ 幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

### 第75話主人公 宮下春樹

(筑波大学大学院 システム情報学研究科 構造エネルギー工学専攻 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(□川ガール・■川系男子)

(出身地を流れる川：奈良県秋篠川)

### 「ただ魅せられて」

いつのこと？： 小学校2年生

どの川？： 一色川(岐阜県 庄川水系)

曽根さんからバトンを受け取りました。白川研究室所属の宮下春樹です。今回は、私の出身地域の河川ではありませんが、思い入れの深い川について紹介したいと思います。

私は、幼少期から両親に連れられて、東北や中部など様々な地域のキャンプ場に足を運び、山や湖といった自然に触れて育ちました。その多くは幼少期ゆえにあまり覚えてはいませんが、小学校2年生の8月に訪れた岐阜県高山市の一色の森キャンプ場は、15年経った今でも忘れることはできません。一色の森キャンプ場には、キャンプサイトのすぐ近くに一色川という小さな溪流が流れています。初めて溪流を身近に眺めた私は、落ち葉の降り積もった腐葉土の香りとひんやりとした空気、ミズナラの木々からこぼれる木漏れ日、さえずる小鳥と虫の声、そして涼やかにきらめく水の流れ、その全てに魅せられました。その日私は溪流に一目惚れをしたのです。キャンプの期間中、私は父の缶ビールを冷やすため、たき火の松ぼっくりを拾うためと、何かと理由をつけては小川に赴き、流れを見つめて、水をすくい、手をゆすぎ、また眺め、兄姉に呼び戻される、そういった時間を過

ごしました。また、そのキャンプでは溪流釣りも体験しました。私は上手く釣れなかったものの、家族が釣ったドジョウやヤマメをバケツの中で眺めたり、岩場を跳び回ったりするなど、溪流を全身で楽しんだ記憶があります。これらの思い出は今なお自分の中で息づき、風景や匂いを鮮やかに思い出することができます。

以降の私はずっと川に魅せられてきました。一色の森キャンプ場には足を運ぶよう何度も父に呼びかけ、一度だけ再訪ができませんでした。そのほか山を歩く際にも、どこかへ旅行へ行く際にも、川の気配を感じては眺め、水に触れ、場合によっては足を浸け、ひたすら川に親しんできました。高校生を過ぎ、1人で旅行が出来るようになってからも、必ず訪れた地域の川を眺め、心を躍らせ、その流れに思いを馳せるようになりました。

川は、自然と人が最も多く交流する場だと考えています。その形は稲作の水張りであったり、納涼の川床であったり、屋形船の川下りであったりするでしょう。川を通じた自然と人との交流がよりよいものになるように、いま私は白川先生のもとで研究をおこなっています。今後の人生も、少なからず河川に目を向けながら生きていくと思います。誰かの生き方が定まってしまうほど劇的な出会いでなくとも、1人でも多くの方が川に親しみ、よりよい思い出を持てるように、これからも心を尽くしていきたいと思えます。

(次は芦村さんにバトンを託します)